

こんなところに 市民憲章

1. 富士山のように 強く正しく
きまりを守り
平和で安全な社会をつくります

平成2年 1日に5.1件の人身事故



△こうならないように

平成2年1年間に市内で発生した人身事故は1,875件、負傷者は2,295人で、いずれも過去最高を記録しました。これは1日当たり5.1件の人身事故があり6.3人のけが人が出たこととなります。反面、死者のみが前年と比べて8人減ったのは喜ばしいことです。

さて、県内ではことしに入って、交通事故死が史上最悪のペースでふえ続けています。交通事故はだれが遭っても嫌なもの。だれもが交通ルールを守り、愛情運転で安全な富士市をつくりたいものです。

▷姫野さんファミリー



「初めまして!! 市民一年生です!!」
最初は面倒だったごみの出し方、でも、分別は大切ですね。
二月の札幌といえば「雪まつり」。富士で生まれ育った人には、寒さの想像もつかないのでは。今回は、札幌から昨年十月に転勤で靖国町(富士南地区)にみえた姫野毅さんのお宅に伺いました。

姫野さんのお宅は、旭化成にお勤めの毅さん(三十二歳)と奥さんの勝恵さん(三十三歳)、長男の泰輝君(三歳)、次男の貴壮君(一歳)の四大家族です。
「姫野さんて珍しい名字ですね」
毅さん「出身は大分です、大分や宮崎には多いんですよ」
「札幌市はどんな街」
毅さん「二年間住んでいただけですが、大変いいところでした。最初は北の外れなんて思いますが、家の中は暖房がしっかりしていて暖かいし、夏は涼しい。都会なの

に、車でちょっと走れば大自然も満喫できます」
勝恵さん「札幌のど真ん中に住んでいたの、生活が便利でした」
「富士市の住み心地は」
勝恵さん「子供を育てるには札幌よりいいですね。小さい子は冬の間、外へ出られませんから。それに富士市の人は親切で、人情味があります。お百姓さんから野菜をいただいたりするんですよ」
「行政の違いは」
勝恵さん「ごみの出し方が札幌では大ざっぱでした。分別収集は、最初面倒くさいと思いましたが、環境のことを考えると、大切なことですね。また、札幌市では、三歳になると週二回幼稚園の先生が地域に来てくれる制度があり、よい制度と思いました」
「市へ要望はありますか」
毅さん・勝恵さん「美術館がほしいですね。それから、家の周りには公園がないので、子供の遊べる広場がほしいと思います」



「広見文庫のおばさん」
宮崎久子さんが、広見文庫のボランティアを始めてから十一年。子供たちから「文庫のおばさん」と親しまれ、午後一時から四時までは、本の貸し出しや読み聞かせで過ごします。「かばんの中に、童話の本が二、三冊。いつも本と一諸です」。

人を変え、人を育てる本を信じ
「広見文庫のおばさん」で頑張る

宮崎久子さん (中野)



「違」
二年前、宮崎さんは県の婦人活動研修団員として、ニュージーランドを訪問。文庫のおばさんを行動に駆り立てたのは、一冊の本、「クシュラの奇跡」。
障害を持つ女の子クシュラが、両親の読み聞かせによって、次第に目覚めていく過程や、遠くに通えないクシュラたち六家族の子供たちのために学校をつくってくれた政府のことなど。
「違いを認め合い、こんな対応のできる国を見てみたかった。あこがれでした。富士市では、私が四人目。経費の半分は私費だから、大勢の人が参加できるように市の応援を期待します」。
「人」
「本は私の先生。私の子供たちも、本が育ててくれたと思っています。今の活動は、本への恩返しみたいなもの。あそこは楽しかったなあって、成長した子供たちがまた遊びに来てくれたら、とてもうれしい」。